

アルバニア語における 「不変化詞 + 接続法」の機能的特徴について

井 浦 伊知郎

0.序

アルバニア語の動詞には直説法 (indicative), 接続法 (subjunctive), 希求法 (optative 願望法とも), 感嘆法 (admirative) があり、それぞれの屈折変化を持つ。このうち接続法は常に小辞 *të* と共に用いられる。未完了形で非現実話法や条件法として用いられるなど、他の印欧語の接続法と同様の役割を持つ。

(1) *Sikur të kisha të holla, do të udhëtoja.*

as if have-subj.impf.sg.1 money will travel-subj.impf.sg.1

「もしお金を持っていたら旅行するだろうなあ」

これに加えてアルバニア語の接続法は、可能、許可、義務、意志、単純未来などをあらわす (動詞由来の) 不変化詞と共に用いられる。これは他の多くの印欧語ではむしろ動詞の不定詞と共に用いられるものであるが、現代標準アルバニア語には本来の不定詞が存在しないため、これに代わるものとして用いられている面が大きい。従ってアルバニア語では、他の印欧語の場合に比べて接続法の役割の範囲が広いことになるのだが、それは具体的にどのようなものであろうか。本稿では、アルバニア語の動詞の接続法が不変化詞と組み合わせられて用いられる例を現代のテキストから取り出し、その意味機能を考察する。

1.不変化詞 + 接続法

本稿で取り上げる動詞由来の不変化詞は主に次の通りである；

do (意志・未来 英 *will* または *want*) *duhet* (義務・必然 英 *must* または *should*)

mund (許可・可能 英 *can* または *may*) *le* (許可・勧誘 英 *let* または *shall*)

先に述べたように、これらの動詞は、他の印欧語 (特に西欧語) なら不定詞と共に用いられることが多い要素である。なお、これらに加えて接続詞 *që* もよく用いられるが、*[që] të* + 接続詞「～するため」でしばしば省略され、統語的・意味的相違が特に見られないので、ここでは扱わない。

2. 「do+接続法／duhet+接続法」

doは動詞dua「欲する」に由来する不変化詞であり、duhetはその中・受動形が固定されたものである（ただし未完了形ではduhej、複数形ではduhenとなることがある）。従って語源的には同じグループに属するが、意味はそれぞれ異なる。do+接続法現在は「単純未来（simple future）」や「意志（volitive）」の意味で用いられる。

(2) Kur të kthehet do t'i flas.

when return-med.sg.3 will 3.sg.dat talk-subj.sg.1

「[彼女が] 戻って来たら、話をしよう／することになるだろう」

(3) Ku do të vini? Do të dalim një here.

where will proceed-subj.pl.2 will go out-subj.pl.1 one time

「君たちどこへ行くつもりだ？」 「我々はちょっと外へ出てみるよ」

条件節と組み合わせた例(2)は単純未来ととることもできるが、例(3)は明らかに「意志」の例である。これに近いものとしてkam+二次的不定詞（për të+分詞）から成る構文があるが、これは「単純未来」などというよりはむしろ「必然性（necessity）」の意味を持ち、英語の「have to+不定詞」あるいは「be to+不定詞」にほぼ近いと言えよう。

(4) Më ka akoma për të dhënë njëzet e shtatë napolona.

1.sg.dat. have-sg.2 more give-part. twenty and seven napoleons

「彼は私にもう27ナポレオン [金貨] を渡すことになっている」

duhet+接続法現在は「義務（obligative）」や「必然」の意味で用いられる。

(5) Ti duhet ta kuptosh.

thou must 3.sg.acc. understand-subj.sg.2 「君はそれを理解しなければならない」

(6) Duhet ta ketë kuptuar

must 3.sg.acc. understand-subj.pf.sg.3 「彼はそれを理解したはずだ」

不変化詞doあるいはduhetには接続法でなく分詞を伴う例もあるが、いずれの場合も例外なく「義務」「必然」の意味である。しかも主語はほぼ3人称に限られ、また常に受身の表現であり、しかも主に話し言葉に見られる。従ってこれは話者による「必然性」の認識を示すものに限って用いられており、duhet+接続法の用法とはほとんど競合していないと考えられる。

(7) Ara do korrur, gruri do shirë, lopa do mjelë, hajvanët duhen grazhduar.

field will mow-part. grain will thresh-part. cow will milk-part. domestic-pl. must feed-part.

「畑は収穫され、穀物は脱穀され、牛は乳を絞られ、家畜達は餌を与えられていなければならない [頃合だ]」

(8) Duhen marrë masa të rrepta nga qeveria.

must take-part. measure severe by government

「政府によって断固たる処置が取られるべきだ」

(9) Gjer në xhade duhej ecur një orë.

till to highway must go-part. one hour

「国道に出るまで一時間はかかるはずだ」

但し、場合によっては話者自身が行為主ともとれるような例もあった。

(10) A duhet nisur tani?

(interrogative) must start-part. now

「(独言、或いは同行者に向かって) もう出発してもいい頃ではないか？」

ここで、この機能上の差異を疑問文についても見てみよう。(11)は肯定か否定かのいずれかで答えられ、(12)は何らかの補足語で解答することになる。(13)は付加疑問でどちらにも属さないように見えるが、基本的に(肯定の)返答が必要とされる点からして、このグループに入れて良いだろう。

(11) Ti do të ikësh, apo do të presësh?

thou will go-subj.sg.2 or will wait-subj.sg.2

「君は行くつもりかい、それとも [ここで] 待っているかい？」

(12) Shoku yt kur do të vijë?

comrade your when will come-subj.sg.2 「君の仲間はいつ来るのか？」

(13) Ti do të vish me mua, apo jo?

thou will come-subj.sg.2 with me or not 「君、僕と一緒に来るよね？」

一方、話者の中で意見は或る程度定まっているが、一定の疑念や躊躇、或いは抗議の意図などを含みつつ、疑問文として発話する場合にもdo+接続法が用いられる例がある。

(14) Do të kenë arritur? Me siguri.

will arrive-subj.pf.pl.3 with sureness 「あの人たち来た頃かなあ?」「決まっているさ」

次は(10)と似た例であるが、主語の数・人称は明示されている。

(15) Po unë kur duhet të nisem?

then I when must start-subj.pl.1 「で私はいつ出発すべきなのか? (純粋な疑問)」

(16) Unë do të të mësoj tërë jetën? Turp të kesh!

I will 2.sg.dat. teach-subj.sg.1 whole life shame have-subj.sg.2

「私は君に一生教え続けるのかい? 恥を知りたまえ! (忍耐の限界)」

(17) Ti do të më qëllosh mua?!

thou will 1.sg.acc. shoot 1.sg.acc. 「おまえ、俺を撃つつもりか?! (撃たれる直前)」

さらに、1人称を主語とした場合の内省的な問いかけ、「思案法 (deliberative)」と言えるような例もある。

(18) Po bojën ku do ta marr?

then color where will 3.sg.acc.+take-subj.sg.1

「(絵の具を選びながら独言) さてどの色にしようかな?」

3. 「mund+接続法」

この場合は、主観的或いは客観的な可能性 (possibility) や許可・容認 (permissive) を示すものが大半である。ただ、それ以外の用法となると現時点では、前節の「do/duhet+接続法」や次節で述べる「le+接続法」ほど広がりはないように見える。

(19) Jo, nuk mund të ishte ai!

no not can be-subj.impf.sg.3 he 「いや、彼であるはずがない!」

(20) Unë mund të zë dhe pesëdhjetë në ditë... me leq i zë shumë kollaj.

I can catch-subj.sg.1 also fifty in day with snare 3.pl.acc. catch-sg.1 more easily

「一日50匹も [魚が] 取れるよ...罾を使えばもっと楽さ」

(21) Ju të tjerët mund të shkoni.

you the others may go-subj.pl.2 「他の人たちも行ってよろしい」

4. 「le+接続法」

この用法は一般的に、話者も含む行為の当事者 (1人称複数) に誘いかける表現で用いられる。次にあげる最初の例(22)がこれにあたる。しかしながら、実際にはもっと幅広く「許可 (permission)」や「命令 (jussive)」の意味を示したり ((23)から(25)まで、命令の強さには差がある)、特に例(26)のように1人称の文ではdoに近い「意志 (volitive)」の機能を持つ場合が多い。

(22) Le të mos flasim më mirë për këtë gjë...

let not talk-subj.pl.1 better about this thing

「(我々は) そのことはなるべく話さないようにしましょう…」

(23) Fjonggoja ra në vatër... Le të digjet.

ribbon fall-aor.sg.3 into hearth let burn-pas.subj.sg.3

「リボンが炉の中に落ちた... [いいから] 燃やしてしまえ」

(24) Më mirë le ta vendosë këshilli.

better let set-subj.sg.3 council 「会議を開いた方がいいだろう」

(25) Ata që shkojnë për në front të mos presin... le të luftojnë një herë...

those which go-pl.3 to front not wait-subj.pl.3 let fight-subj.pl.3 a time

「前線に赴く者は〔指示を〕待つべからず…まず戦え…」 (明らかな命令)

(26) Por le të them se do të bëhet.

but let say-subj.sg.1 that will make-pas.subj.sg.3

「しかし(私は君に)言うておくが、〔事態は〕そうなるだろう」 (意志)

実はこうした傾向は既に述べた「do+接続法」でも見られる。次の例は明らかに2人称の相手に対する「命令」である。

(27) Do të vesh pa tjetër, se ka ardhur urdhër i posaçëm.

will go-subj.sg.2 of course as come-pf.sg.3 order special

「もちろん君は行くのだ、特別な命令が出ているからな」

このようにleも不変化詞本来の意味(『~のままにしておく』『~させておく』)より幅広く用いられており、実際の文例の持つ意味は不変化詞ごとの分類に必ずしも従わない。

5.その他

その他に、「不変化詞+接続法」の例で上の分類に入らなかったものをあげておこう。

(28) Pa të bëjmë pak hesap!

do-subj.pl.1 a little bit count

「[いろいろ言う前に] まあ、とりあえず勘定してみることだ」

この例は実質的に命令文であり、請求書を持つ相手に対する遠回しな命令・要求を、不変化詞pa+接続法1人称複数で表現している。paは本来「~なしで」という意味で、否定文に用いられるのだが、この場合は明らかに「やってみろ」と要求しており、接続法の「命令法」としての機能を補完する小辞として用いられている。次の例も — 接続法ではなく「kam+二次的不定詞」によるものだが — 命令法や希求法を用いずに「命令」を意図していると思われる。ただし、直截さを避ける意図があるか否かは、これだけでは判らない。またこのような例は(おそらく当然のことだが)2人称の例でしか見つかっていない。

(29) Ke për të vdekur!

have-sg.2 for die-part. 「死ね!(汝死すべし)」 (命令法Vdik! 希求法Vdeksh!)

6.考察

接続法が小辞tëと共に用いられる例はアルバニア語最古の文献(1555年)中に既に確認されており、文献時代以前からアルバニア語において「小辞+動詞屈折形」からなる接続

法が存在したことは明らかである。

ただ、幾つかの歴史言語学的研究を見る限り、その機能は今日のものとは必ずしも一致していない。第一に、小辞 $t\ddot{e}$ を伴わない接続法の例（形態的に直接法と判別できる場合に限る）が僅かながら中古期の文献に存在する。第二に、元来、接続法の用例はほとんど従属節内に集中していたが、時代が進むに従って使用範囲が拡張されており、今日では主節あるいは単文内で接続法が用いられることは何ら不自然でなくなっている。

一方、拙論（井浦2003）でも述べたように、標準アルバニア語に不定詞は存在しない（消失したか、或いはもともと発達しなかったかは定かでない）が、「不変化詞＋分詞」から成る「二次的不定詞」も比較的広い範囲で用いられている、と考えられる。

とは言え、西欧語の不定詞ほど多彩な役割を持っているとは言い難く、その機能の大半は本稿で述べた「不変化詞＋接続法」でまかなわれる形になっている。先の歴史的研究と併せて、こうした事実も、アルバニア語の接続法がその機能を拡張させ、不定詞の担うべき役割にまで浸食してきた可能性を示している（早くとも6～8世紀頃との仮説有）。実際、もし「二次的不定詞」が発達していなければ、アルバニア語古来の不定詞の機能は全て接続法にとって替わられていたのではないかとする見解（Demiraj 1993, 334f.）さえある。

本稿ではそうした接続法の機能拡張が具体的にどのようなものであるか、例をあげて示した。もちろんこれらの微妙な差異は接続法そのものに起因するものではないが、例えば西欧語であれば不定詞句や命令法、或いは希求法などで表現し得るような発話まで接続法（時には『二次的不定詞』）を用い得る点などは興味深い。今後は、こうした多様な機能拡張が現在も進行中のものなのか否か、分析する必要があるだろう。また、接続法の例と競合しているように見える他の構文（例(7)～(10)）についても、その意味上の差異を調べる必要がある。

なおアルバニア語では、代名詞の重叙表現の適用範囲が歴史的に拡張していることが既に知られているが、同じような傾向はマケドニア語やルーマニア語など周辺言語にも見られる（不定詞が存在しない点も共通）。このことから、接続法の機能についてもこれらの言語はアルバニア語と共通の傾向を持つ可能性がある。

参考文献

Domi, Mahir(red.) (1997). *Gramatika e gjuhës shqipe II. Sintaksa*. Tiranë: Akademia e shkencave e RSH.

Fiedler, Wilfried & Buchholz, Oda (1987). *Albanische Grammatik*. Leipzig: Verlag Enzyklopädie.

井浦伊知郎（2003）「アルバニア語北部方言の不定詞に見られる形態および機能面の特徴」 『ニダバ』 32号, 76 - 84